

岡崎嘉平太記念館

だより



Vol. 23

アジアにおける日本の将来

岡崎 嘉平太

三〇年ほど前だったと記憶しているが、親しくしていた、ある大商社のシンガポール支店長だった中山一之君(故人)が手紙を寄こして「今東南アジアに来ている日本人は、商用であれ、視察であれ、観光であれ、みんな態度が傲慢で、現地の民衆に対し優越感をむき出しにしている。これでは遠からず激しい反発を招くに違いないと思う。岡崎君、日本の有力政治家に、このことを知らせて、日本人の反省を促してくれ」と警告してきたことがある。(中略)後年田中総理が、東南アジア諸国を歴訪した際、事実となったことは、われわれのよく知っているところである。また私は若い頃から、東西の歴史書を読んで知ったところであるが、歴史あつて以来、東西を問わず、一度覇権を握った国は、やがて衰退して行く。そして二度と覇権を取り戻した国はないという事実である。さらに、第一次大戦の頃は、私はまだ高校生であった。(中略)私は中国の留学生と親しくして、いささかアジア諸国の事情に眼を開いていた(中略)当時の世界人口の半ば、十億の人口を擁するアジア諸国が日本を除いて悉く、欧米の植民地或いは亜植民地に

され、文化は抑圧され、人民は貧困に喘いで居った、その中でわが国独りが、列強の一員になったといつて驕りたかぶっているのは危ない。わが国は逆に、今こそ中国などと協心戮力アジア諸国、諸民族の文化を復興し、貧乏を追放し、アジア十億の大衆と同苦共甘すべき時ではないかと考えたのである。第二次世界大戦でわが国が敗北した後、中国の要人と会見すると、彼等は齊しく、今後は、相共に力を合わせて、アジアを良くしよう、アジアに力をつけよう、と言つのであつた。(中略)アジアにおける日本の位置はこれからどうなるのか、或いは日本はどうすべきかなどを考えると、前述三つのことを十分に頭に置いて、指導の地位にある者はもとより、一般の国民一人一人も亦、われわれ日本人が現在は勿論、子々孫々もアジア諸国の人々から歓迎され、親しまれて、人生を楽しく送れように、常に心掛けるべきであると思う。

― 出典「これからどうなる日本世界二一世紀(岩波書店 編集部編一九八三(昭和五十八)年岩波書店)発行より抜粋 ―

一年の計には穀を植え十年の計には木をうえ百年の計には人を樹えよ

小倉鬼一氏原

録文之語

岡崎嘉平太書

「一年の計には穀を植え十年の計には木をうえ百年の計には人を樹えよ」原典は古代中国の政治家管仲(かんちゅう)の言葉
小倉鬼一氏蔵

新任御挨拶 私は、この4月から当館の館長を務めております河内(かわち)と申します。こちらでお世話になる前は、岡山県消費生活センターで特殊詐欺や様々な消費問題の相談に関わる仕事をしていました。全く畑違いの分野で少々戸惑いもありましたが、岡崎嘉平太先生の資料をみるにつれ、遺された業績はもとより人間的な魅力に惹きつけられました。

また2ヵ月という短い期間ではありますが、お目にかかった方とお付き合いをするにつけ皆さまの支えがあってこそ当館は成り立っているのだと実感しております。私にできることはほんの些細なことではありますが、嘉平太先生に関する様々な資料を次の

世代にきちんと良い状態でつなぐこと、この貴重な資料と情報を広く皆さまに利用していただけるよう努めること、この相反する二つの仕事に本気で取り組みたいと考えております。そして皆さまが交流しやすい、再び訪れたい館でもありたいと思います。

職員一同で力を合わせなお一層努めてまいりますので、引き続きご指導、ご協力を賜りますようお願いいたします。 岡崎嘉平太記念館 館長 河内章男



大橋洋二ANAホールディングス(株)相談役(中央)、河内館長(右隣)、神原前館長(左隣)

平成27年6月撮影

第9回 嘉平太が愛したふるさと岡山写真展の開催

岡崎嘉平太記念館では、岡崎嘉平太氏が愛したふるさと岡山のよさを伝えたいという思いで、毎年公募による写真展を開催しています。当館では1人1点の応募で、全作品を展示することにこだわっており、回を重ねるごとに応募数及び作品の見応えが増していることは誇りです。



第9回目の最優秀賞は、高橋克美さん『夕照』に決まりました!



▲審査の様子

最優秀賞 高橋 克美 「夕照」
優秀賞 松本 ケンイチ 「桜の石段」
堀 紘治 「春うらら」
審査員特別賞 神崎 由子 「夜の城下町」
小山 憲雄 「10時45分発」
野津 裕一 「夜桜」

今回の応募数は165点でした。平成27年4月18日(土)に、長瀬正己先生(山陽新聞社写真映像部)、森山知己先生(日本画家)、河内章男(岡崎嘉平太記念館長)で厳正な審査をしました。

入選

石原 一夫 「吉備路」
伊丹 弘吏 「悠久の塔」
上田 利博 「棚田残照」
臼井 寛 「ちいさなスノーピラー」
久山 智二 「紅の衣を身にまとい」
河口 毅 「吉備路黎明」
最相 政実 「晩秋の溪」
新川 洋子 「そう…いつかの空」
野田 清人 「楽しいひととき」
水野 三生 「秋の彩」



▲会場の様子

作品は、5月2日(土)～7月4日(土)は岡崎嘉平太記念館にて、7月21日(火)～同26日(日)は岡山県天神山文化プラザにて展示します。梅雨の時期ではありますが、多数の方々の来訪をお待ちしております。作品を応募された全ての方に感謝いたします。

岡崎嘉平太国際奨学財団第25期奨学生4名が、嘉平太氏のふるさと吉備中央町を研修のために訪れました。このたびの奨学生は全員女性で、出身国は中国2名、台湾1名、ミャンマー1名でした。

雨模様のなか一行は嘉平太氏の墓参、母校・大和小学校で全校児童や地元の方と交流、氏のふるりの象徴といわれる大和山(おおわさん)山頂での山桜の記念植樹、記念館の見学と過ごされました。



記念館見学の記念に



大和小学校でみんな一緒に

もんげー
たのしい♪



植樹した山桜と
劉詩文さん、蘇家敏さん、劉詩文さん、
ミヨ一(Myo Thandar)さん

岡崎嘉平太国際奨学財団は、嘉平太氏の遺志“アジア諸国の人づくりを支援し、相互理解と国際交流を推進することで世界平和と発展に寄与すること”を継承することをめざし、ANAが中心となって1990(平成2)年に設立。毎年アジア諸国から日本留学を希望する優秀な青年を日本に招き、大学院修士課程の学費を負担、さらに奨学金を支給する等の支援を行っており、卒業生は100名を超え、様々な分野、国々で活躍しています。当記念館では、開館以来、この財団の奨学生の研修を受け入れ、交流できることをうれしく思っています。今秋の「岡崎嘉平太がめざした世界平和への道を考える講演会」には当財団の卒業生を講師にお招きします。



「夕照」高橋克美



「桜の石段」松本ケンイチ



「春うらら」堀 紘治



「夜桜」野津裕一



「10時45分発」小山憲雄

写真ギャラリー



「夜の城下町」神崎由子

岡崎嘉平太著『サラリーマンの人生経営』の紹介 3回目

入手が難しい嘉平太氏の著書を抜粋して、数回に分けて紹介しています。このたびが3回目。

本書は、昭和35年(嘉平太氏63歳。氏は、昭和36年に全日本空輸(株)代表取締役副社長から社長に就任した)が初版です。本書の内容は、氏が座談会などで、多くの場合、若いサラリーマンに向け、自身の体験を飾り気なく話したことをもとに、実業之日本社に請願され、本に起こしたものです。

■ サラリーマン5年生の心得 ※要約しています。スペースの都合で2回に分けます。このたびは1回目。

まず自分のペースを、組織の中の仕事

技能や能率、そういった個人差が現れてくるが、そういうことにとらわれないうことで、自分のペースをしっかりとものにすることに、心身を集中するほうが本道だ。

ながい目からみれば、他人の仕事ぶりをねたむような人間は、あまり成功しないものである。協調の精神を発揮するほうが、自分も楽しく仕事ができるし、成功の可能性も多い。仕事というものは、上下一致してやらなければならないし、ことの善悪は別として、一旦業務

的な命令がだされたならば、それをうけてベストをつくるのが、組織を強くするゆえん。上役だって、つねに正しい判断をくだし、正しい指示をあたえるものとはかぎらないが、協調を破る行為は、それよりもっと悪質。ある程度がまんして一心に仕事をするのが最善の方策。まず自分の実力を十分に錬磨する。一番大切なことは、いかなる場合に遭遇しようとも、自分から仕事を投げ出してはいけない、うんと勉強しておくこと。

創意・工夫の生かし方

ひじょうにすぐれたアイデアでも、それを実行する段になると、いろいろと問題が起こる場合が多い。アイデアがもし採用されなかったら、どうしてこれが実行されないのかということ自分でわかるように検討、研究し、それでも実行されない場合には、上役になったら実行してみようというくらいの心構えで自分の手帖

なり、ノートなりに書きとめておくようにしたい。

上の方では下のものの気持ちになって、若いものの気持ちをくさらせることのないように注意し、親身になって考え、できるだけ事情をよく説明する。このへんの人間関係を、もう少し、お互いによく考えてやる必要があるのではないか。

いやな仕事は伸びるチャンス

いやな仕事があたえられたときは、それに耐えて、躍起して、最善を尽くしたい。「いまおれは社長になる修行をしているのだ」と考えるのもいい方法。立派な人間になるためには下積みの仕事を体験しておくことだ。それでも、どうしてもその仕事をマスターできないという自覚がはっきりもてたなら、会社のためにも、

マイナスになるからと上司に申しでて、職場を変えてもらうこともできる。

また、自分が上役になったら、下積みの仕事をしている人には、絶えず、親しみのことばをかけることを忘れてはならない。



編集・発行：岡崎嘉平太記念館

〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川4860-6 きびづら内

TEL 0866-56-9033 FAX 0866-56-9066

ホームページ <http://www.okazaki-kaheita.jp>

Eメール okmh@okazaki-kaheita.jp

2015年6月発刊